

アーティスト インタビュー

津村禮次郎 REIJIRO TSUMURA

小金井薪能の創設者として市民におなじみの観世流シテ方の能楽師、重要無形文化財保持者(総合認定)、津村禮次郎さんが新たな作品に挑みます。サン・テグジュペリ『星の王子さま』を能とサクソフォーンで綴る「『星の王子さま』との出会い」。どのような作品なのか、そして作品への思いについてうかがいました。

能と『星の王子さま』
実は最高の相性

古典作品、創作能だけでなく、ダンスや演劇などジャンルを超えたコラボレーションで多彩に活躍する小金井在住の能楽師、津村禮次郎さんが3月、小金井 宮地楽器ホールで新たな作品に挑みます。サン・テグジュペリの『星の王子さま』を題材にした「『星の王子さま』との出会い」です。時代や年齢を超えて愛されている世界の大ベストセラー『星の王子さま』は、サハラ砂漠に不時着したパイロットの“ぼく”が、小惑星からやってきた王子さまと出会う物語。この話を能とサクソフォーンとのコラボレーションで上演します。

「『星の王子さま』は大好きな作品ですし、ダンスや演劇などでのパフォーマンスはいろいろ観ています。ですが、まさか自分が演じるとは思ってもみませんでした。改めて読むと、この作品を表現するには能が合いますね」

『星の王子さま』と能がなぜ合うのか。それは、小惑星という宇宙、「異界」から来た王子さまが、地球という“この世”にメッセージを伝える物語である点です。

「能では、たとえば『羽衣』がそうですが、天上界つまり宇宙から天人が人間世界を見ているという視点があります。そして天人が人間に宇宙の真理を伝えるのです。これは『星の王子さま』に通じるのではないのでしょうか」

能の主演のシテは神、亡霊、鬼といった“異界”の人であり、相手役のワキは“この世”の人。『星の王子さま』の王子さまと“ぼく”の関係は、まさに能と言えるかもしれません。『星の王子さま』は、実は能と最高の相性の作品なのです。

うたい おおつづみ
謡、大鼓、サクソフォーン
3つの響きで綴るステージ

「『星の王子さま』との出会い」は、もともと三鷹で2021年、サクソフォーン独奏、語り、映像によって上演した作品です。今回の公演は、能が加わることで大幅にバージョンアップ。ステージに能舞台を作り、照明もより幻想的になります。津村さんはどんな役を演じるのでしょうか。

「物語の登場人物を演じるのではなく、精神世界のひとつの存在として演じます。そして、物語の鍵になるフレーズを謡います。発声は、作

品に合うよう少し現代的にアレンジします。私自身、サクソフォーンと共演するのは初めてなので楽しみです。『こちら側』の世界と『あちら側』の世界でフロアを分けますが、ときに境界を超えてみようかと考えています」

共演は、サクソフォーン奏者の仲野麻紀さん。2021年のステージでは、サクソフォーンだけでなく、クラリネット、ピアノと複数の楽器をひとりで演奏して、物語の世界観を見事に表現されました。今回も複数の楽器を演奏し、能とインスピレーションを与え合いながら『星の王子さま』を音で綴ります。また、能の楽器も加えたいという演出家の意向に津村さんが応え、選んだ楽器は「サクソフォーンのソフトな音色には、硬く強い音が合う」ということで大鼓。小金井ゆかりの鼓奏者、佃良太郎さんが共演されます。3人の初顔合わせは11月に行われ、謡、大鼓、サクソフォーンの“会話”にとってもよい感触を得たそう。能とサクソフォーン、能と『星の王子さま』、2つの“出会い”から生まれる「『星の王子さま』との出会い」をどのように見てほしいか、津村さんは語ります。

「パフォーマンスとしては、純粋に楽しんでいただければと思います。そして観終えてお帰りになるときに、もし星の王子さまが現在の世界を見たらどう思うのだろう……と考えることで、今の社会情勢を思うきっかけになればいいですね。私たちがステージで『星の王子さま』をお見せする意義は、そんなところにもあるのではないのでしょうか」

能とサクソフォーンが語る『星の王子さま』のメッセージを、ぜひ客席で受け取ってください。

【につぼん、体感。—古典芸能の祭典】
[FOCUSこがねい/THE SUPER PREMIUM]

「星の王子さま」との出会い
～能と音楽で綴る物語～

2024年3月9日(土) 16:00開演 大ホール
全席指定 一般 5,000円 U25席 3,000円
[こがねいメンバーズ] 一般 4,500円

津村禮次郎(能楽 シテ方 観世流) 仲野麻紀(サクソフォーン)
佃良太郎(能楽 大鼓方 高安流)



©Ishida Masataka



公演の詳細はこちら

